

評伝：ベラ・アルウィン(朝河貫一・後年の恋人)

——日本の幼児教育のために一生を捧げたアメリカ二世女性の生涯——

石 川 衛 三

〈目 次〉 I はじめに

II 東と西の出会い

III ベラ生い立ちの記

IV ベラの修業時代

1 伊香保にて

／子どもたちとの出会い

／幼児教育への開眼

2 プロフェッショナルへの道

／アメリカ留学～伊香保・日曜学校事件

／再起・復活～ヨーロッパ留学

V アルウィン学園の創設

VI 朝河貫一とベラ

ベラ女史愛誦の聖句

^{しゅ}主はわたしの^{ぼくしや}牧者であって、
 わたしには^{とほ}乏しいことがない。
^{しゅ}主はわたしを^{みどり}緑の^{まきば}牧場に伏させ、
 いこいのみぎわに^{ともな}伴われる。
^{しゅ}主はわたしの^{たましい}魂をいきかえらせ、
^なみ名の^{ただ}ためにわたしを^{みち}正しい^{みちび}道に導かれる。
 たといわたしは^し死の^{かげ}陰の^{たに}谷を歩むとも、
 わざわいを^{おそ}恐れませんか。
 あなたがわたしと^{とも}共におられるからです。
 あなたのむちと、あなたのつえはわたしを^{なぐさ}慰めます。
 あなたはわたしの^{てき}敵の^{まえ}前で、わたしの^{まえ}前に^{えん}宴を^{もう}設け、
 わたしの^{あぶら}こうべに油をそそがれる。
 わたしの^{さかずき}杯はあふれます。
 わたしの^い生きているかぎりは
^{かなら}必ず^{めぐ}恵みと^{ともな}いつくしみとが伴うでしょう。
 わたしはとこしえに^{しゅ}主の^{みや}宮に^す住むでしょう。



壮年のベラ先生



メリオン
 メリー
 リチャード
 父
 アグネス
 母
 ペラ
 ロバート



幼稚園児とペラ先生

I はじめに

これから、一人の幼児教育者の感動的なお話を致したいと存じます。その名はソフィア・アラベラ・アルウィン (Sophia Arabella Irwin) といい、明治 15 年 (1882)、アメリカ人を父とし、日本婦人を母として出生しました。彼女 (以後、一生の通り名であった「ベラ」と呼称) は、その 75 歳の全生涯を通じ、日本の幼児教育 (幼稚園の設置とその保育者の養成所開設) に、全身全霊を以て献身した人物です。彼女は幼児教育の理想を、キリスト教の信仰の基に据 (す) え、宗派やミッションの助けを受けることなく、個人の力で、ただ自己の清教徒的な信仰一筋に生き、その初志を貫徹したのでありました。

以下に述べますことは、ベラの生涯を一貫する〈愛と努力と、献身と忍耐の教育〉に対して、門弟方が心をこめ、せめての感謝と報恩のための鎮魂譜 (ふ) として綴られた『荒野 (あら) のに水は湧きて——ベラ・アルウィンの生涯——』〔昭和 55 年 (1980)、学校法人アルウィン学園 (東京都杉並区松庵 1-9-33) 発行〕と題する、500 頁余の大冊「伝記」より垣い間みた、今は亡きベラのプロフィールであり、わけても故・朝河貫一博士が後年、その手を渴望してやまなかった、かの恋人ベラの面影を伝えうる、と思える私なりのアブストラクトないしダイジェストであります。

いうまでもなく、今回のトークは先般、小生が公にした「朝河貫一の後年を彩った女性——その哀切なる愛と傷心の軌跡——^(注)」と題する朝河・評伝の補説をなすものであり、同評伝中のヒロインが外ならぬ件 (くだん) のベラ女史であります。偶然なる好運によって、ベラの創設になる上記「アルウィン学園」の所在を知ったわけではありますが、その「伝記」(および関係者の回想) に偲ばれる彼女の生涯は、きわめてドラマチックで深い共感と感動を誘うものがあり、かくて〈朝河とベラの邂逅と別離〉は一段と、その光と陰影とを加え、そのドラマ性も高まりを見せるのであります。

Ⅱ 東と西の出会い

日米和親条約（1854年）の締結後、アメリカがその貿易市場開拓のため、東洋進出の一環として設立したものの一つに「太平洋汽船会社」（Pacific Mail Steamship Company）がありましたが、その日本駐在員として、慶応2年（1866）、横浜に上陸したアメリカの一青年がおりました。時に弱冠22歳。その名をロバート・アルウィン（Robert Walker Irwin）と申しましたが、彼が外ならぬベラの父親となるべき人物でした。彼はフィラデルフィア出身、かの有名なベンジャミン・フランクリンの後裔で、来日後、日本の海外貿易や海運業に多大の貢献をし、明治の元勳諸公・知名の実業家等とも親交がありましたが、また「ハワイ移民の父」とも呼ばれ、その側面でも活躍し（ハワイ公使）、その他数々の功勞に対し、勲一等瑞宝章、そして大正14年（1925）永眠の際には勲一等旭日大綬章を賜っております。

話を戻しまして、ロバートが横浜の米国商館ウォルシュ・ホールに勤務、長崎支店長を拝命の頃、横浜本町通りのある貨幣両替店にふと立ち寄った時、たまたま彼のために日本茶を接待してくれた一人の、キリリとした美しい日本の少女と出会うのですが、この人こそ誰だろう、ベラの母たるべき「武智イキ」その人でした。詳細は略しますが、一目見て、すっかり彼女の「とりこ」となったロバートは、あらゆる障害にもめげず、人を介し、あの手この手で彼女を求め続け、さまざまな紆余曲折をへて、その不屈の誠意によって、（封建性根強いあの時代にあって）遂に彼女を妻としたのであります。

なお、ここで（ベラの）母イキについて一言しますと、彼女の実家は日本橋木挽町1丁目にありましたが、父・林金造は札差（ふださし）なる家業を（父親の金三郎から）継いでいましたが、イキが10歳の時、かねて商売上の交渉のあった（子どもに恵まれない）元土佐の藩士・武智惣助夫婦から懇望されて、養女となります。その武智家は浅草の橋場に住み、手広く海産物商を営み、商売繁昌で、裕福であったため、イキは当時の商家の娘としての最上

の待遇を受けたのでした。様々の女子の嗜（たしな）みや行儀作法、読み書き、手習いからけい古事の琴や茶の湯、華道から、日本舞踊の末まで、女子一通りの修業を受けます。かくて生来の美貌に加えて才気煥発の性情に磨きがかかり、イキイキ(?)とした、一枚絵にもなる程のすばらしい娘として成長したのであります。

Ⅲ ベラ生い立ちの記

アルウィン家は前述のようにフィラデルフィアの名家なので、日本婦人との結婚には種々の障害・反対があり、各方面からの圧力もかかったのですが、ロバートの武智イキに対する愛情の深さが、あらゆる迫害や反対を斥けて、正式な入籍となるのであります。明治 15 年 (1882) のことでした。

明けて翌明治 16 年 (1883) 東京芝飯倉栄町のハワイ公使館内で、ロバートとイキとの間に、長女ソフィア・アラベラ・アルウィンが誕生しました。彼女は両親の愛と喜びを一身に受け、豊かな生活環境の中で、丈夫で元気な、可愛らしい赤ん坊としてスクスク成長しました。そして 5 歳になると築地の語学校（現在の雙葉学園小学部の前身）に入学しました。

やがて明治 28 年 (1895) 12 歳になったベラは、父に連れられて渡米、フィラデルフィア市ハミルトンに住む父の母（ベラの祖母）の許に身を寄せることになりました。父の希望で、アメリカでの正規の女子教育を受けるためです。そしてベラは 9 月の新学期から、同市ハミルトン St. のマダム・サトンの経営する女子寄宿学校に入学しました。マダム・サトンはベラには従姉にあたる人で、この学校はアメリカの上・中流の女子に一般教養を教える、つまり日本の高等女学校にあたる全寮制度の学校でした。ベラの成績はといえば卒業までの 5 年間、常にトップでありました。

ただその一方で、折あるごとに自分の出生を思い知らされて、独り悲痛な苦しみに耐えねばならなかったベラでした。ある時、祖母たちと湖の家で週末を過ごしていた折のこと、ベラが自転車に乗って、湖に沿った森の道をサ

イクリングしていると、数人の男の子の群れに追いかけれ「ヤーイ、黄色ん坊のチャイニーズ、おっこちら、おっこちら」とはやし立てられ、真っ赤に怒ったベラがその反撃に打って出たとたん、自転車から落ちてしまい、服は泥だらけ、帽子はペシャンコでスリ傷や打ち身を作り、さんざんな有様になってしまいました。

アメリカは自由独立の気風の国ではありましたが、人種偏見は根強くて白人優位の観念が広く浸透していました。有色人種に対しては本能的な嫌悪感や蔑視感を、大部分の人は抱いていたのです。ベラは外見上は父の肌の色、瞳の色を受けついで、あまり母方には似ていないのですが、凹凸のない眼窩、素直な鼻の形、まろやかな頬、そして亜麻色であっても房々と少しのクセもない、長い沢山の髪の毛と共に、東洋的な面影はおおうべくもなかったと思われます。祖母は取り乱したベラを優しくいたわり、傷の手当をし、しばらく静かにさせておいた後、しっかり抱きしめて長い時間、ことは無く神に祈るのです。そして日夜身边に離さず持っている聖書を読み、ベラにも読ませ、話すのです。

人間はみな創造主によって平等に創られたのである。住む場所によって色々な民族ができたが、白人も黒人も東洋人も、みなが異なって創られたのは神の意志である。男も女も異なって創られているが、どちらが良くも、偉くもない。どんな民族でも創り給うた神の前には同じように平等であり、優劣など有りえないのだ。今日ベラをいじめた子どもたちは、神の意志を知らないあわれな者たちで、人間はみな平等だということを教えてくれる親切な大人が近くに誰もおらず育てられてしまった、本当に気の毒な子どもたちだと思う。いつの日か彼らは神の前に苦しむ人となるだろう。生まれた国をたった一つしか持たない彼らに比べて、ベラは日本もアメリカも、どちらも真実、あなたの国なのである。何と豊富なことではないか。ベラはママを愛し、ママの国の日本を大好きであろう。パパや私の国のアメリカも、愛して大好きにならなければ、ベラの身体のアメリカは悲しむだろう。二つの国を持って生まれたことを誇りに思いなさい。神に感謝しなさい。……

そして祖母とベラは、共にひざまずいて神に感謝の祈りを捧げたのでした。この事件を契機に、それまで鬱屈（うっくつ）していたベラの心は慰められ、苦痛は和らげられ、誇りを取り戻すことができたのであります。

寄宿学校でも実は、たとえばダンス・パーティの時、故意にベラの介添（かいぞえ）を断ったり、誕生日の招待にベラを抜かしてみたり、寄宿舎の部屋の同室を拒否したりする生徒もいたのです。又、ベラの成績が抜群なのでクラスの代表として学校から推せんされた時、「ベラは完全なアメリカ人でもないのに、何故自分たちの代表になるのか」といって抗議した富裕な高官の家の少女もいました。その時、校長のマダム・サトンは「ベラは遠い東洋の国から、はるばる勉強に来て大へんなハンディキャップをもちながら、このように完全な成績を収めている。ベラのパパはアメリカの誇る名門の末裔であり、名誉ある紳士である。ベラを選んだのは、彼女の人格や実力の成果を見ているからであって、平等な正しいことである」と、ハッキリと理非を解明して聞かせました。ベラを理解する友人たちは、「ベラが混血であることは、ベラ自身には何の責任もない、彼女のあずかり知らぬことである」といって味方しました。一方、寄宿舎・舎監の女史は、「ベラは神から、身をもって人類の国際融和のシンボルを示させられているのである。ベラの使命は、人類の平和と平等である」と生徒たちを戒めたので、やがて誰もベラの混血を気にかけなくなり、又ベラ自身も、祖母の感化で努めて自分を抑制し、朗らかに振る舞ったので、いつかすべての垣根が取り去られ、友人たちは自然と、同じ仲間として受け入れるようになり、学校の生活は本当に楽しい、充実したものとなったのであります。

それにつけてもマダム・サトンの躰しづけの教育こそは、きびしい、徹底的なものでした。〔○責任の完遂 ○自己の最善を尽くすこと ○清潔と整頓 ○信仰第一の生活〕がそれでありまして、これらの徳目を軸とする、躰の教育は、愛を基（もと）とする行き届いたものであったため、ベラは十全に訓練され、それらは、やがてベラの第二の天性となっていくのであります。

一方、ベラをこよなく愛してくれる祖母により添って暮す毎日の間に、ベラは、この熱心なピューリタンである彼女から、マダム・サトンとは又異なった方面からの信仰を植えつけられました。祖母は、ベラが自分の混血児という事実に対して、劣等感や孤独感を抱くことなきようと、心を砕き、深い愛情といたわりを込めてベラに教育をしたのです。

湖や森や美しい野や山、樹や鳥、虫、草花を、祖母はベラの手をひき散歩させながら観察させました。そして大自然の美、その繊細さ、その合理性等を開示するのです。

神は万物の創造主である。大宇宙の悠久な成立の歴史、地球と生命の発生。そして人類の創造からその歴史、生命の神秘、巧妙さ。生物はその最も単純な「アメーバー」から、複雑なもの「人類」まで、丁度一覧表のように地上に存在させられていること。宇宙すべての上に一貫して流れている神の意志。そして人間こそ素晴らしい創造物であり、自由な魂を与えられ、考え、感じ、運動し、そして創造し・想像する力、そして現在よりも発展することのできる能力を授けられている。自由な魂は、自由に考え、創造者である神に対しても自由に批判し、自由に受け入れ、又拒絶することも許されている事実を、教えたのです。

祖母は「人類の進展がいかに進もうとも、神の掌からは人間は逃げられません。科学の進歩、文明の発達、みな神の予知する所であるから」と、わかりやすい具体例をとり、ベラに話して聞かせるのです。幼い純真なベラの魂にとって、祖母の語る平易な神の存在の証明は、乾いた海綿が水を吸うように、砂漠に雨が沁み通るように、若々しい感動と驚きを呼び醒ますのです。

祖母の曾祖父、ベンジャミン・フランクリンが、電気と雷の同一性を発見した時に、まず叫んだ言葉は、「神様、あなたは何という不思議な所に、そしてこんなに皆にあからさまな所に、電気を隠しておかれたのでしょうか」といって神を賛美したということです。

祖母はその話を感銘深く、くり返しベラに話してきかせるのです。ちな

みに、祖母の話の中には、曾祖父のフランクリンの話が幾度も出て来ました。フランクリンがどんなに独立力行の人であったか、そして科学に興味をもち、また社会の改良に心を砕き、神への信仰のもとに隣人のため、どんなに骨身を惜しまず働き、奮闘したかなどです。

かくて、静かな湖のほとりの祖母との朝夕は、ベラの身心を憩いと安らぎの中に成長させたのです。祖母のどんな事にも動じない平静さ、不平を訴えず、人を批判せず、ひたすらに優しく、公平にして無私な、柔和な態度。ベラは肉親のきずな以上に強くひかれるものを祖母に抱き、祖母のやせた小さな身体が、千歳の岩のように力強いものに思われて、一刻もその傍を離れ難い思いをかみしめるのでした。

毎日の日課として祖母と共に読む聖書は、ベラが一人で読む時には覚えないうき生きたものに見えるのです。感動した所は沢山ありましたが、祖母が好きで、従ってベラも大好きになった聖書は、旧約ではイザヤ書で、40章は特別に二人の感動を呼ぶのでありました。（ベラはこの章を英語で全章暗誦してしまいます。）また詩編の23篇（冒頭の引用聖句を参照）も祖母の十八番で、孫と一緒に合唱しては喜ぶのでした。

その頃、日本のアルウィン家では、ベラを遠いアメリカ留学に旅立たせた後、母は二人の男児と三人の女児をかかえて忙しい毎日を送っていました。ベラは丈夫な、手のかからない子どもであったのに、二人の弟と三人の妹はたえず病気をしていました。ほとんどの伝染病に一人がかかると、ゾロゾロと結局五人の子どもがかかってしまうのです。ジフテリア、おたふく風邪、水痘（水ぼうそう）、トラコーマ、中耳炎、気管支炎、赤痢、大腸カタルと、応接にいとまがないほどの忙しさです。又学校のことでもつぎつぎに問題が起こり、そのため父はカンシャクを爆発させ、母の苦労は並大抵ではないのです。大勢の使用人たちの間にも何かしらイザコザが絶えません。父の仕事の上から交際の範囲は広く、日本人、外国人を問わず、様々な階級の人たちとの社交も、満遍なく手落ちなくしてゆかねばなりません。また多摩川の別

莊、伊香保の別莊の管理など、母は内に外に、瞬時たりとも心も身体も休まるひまのない状態でした。

ベラは、長女であり、頭が良くて、年齢の割に直感が鋭く、判断力や分別があったので、幼児期から母の良い相談相手でした。家にいる時は、弟妹の世話を良くしました。弟たちの物の取り合いや、ケンカの仲裁などは、母より上手にさばいたのです。腕白な弟たちの上に不思議な支配力をもち、弟妹のおさえ役をしていました。使用人たちにもよく気を配り、幼いながらも皆から一目おかれていたのです。特に父にとっては、目の中に入れても痛くないほどの掌中の珠で、ベラが存在が消えたアルウィン家には、何かしら空虚なものが流れて、生活のバランスが取りにくくなっていました。

母はほとんど毎日、ベラに便りを書いていました。仕事の合間に書くために、一通の手紙を書き上げるのに5日がかりの時もあります。当時のこととて、毛筆で巻紙に変体がなで書くのです。その中に曰く。

「……髪はたびたび洗い、何時もきれいに心がけなさるべく……ノドは弱い故よくよく気をつけ、少しにても白きものがついておるなればすぐお医者におかかりなさるべく……毎日毎晩、パパとママは二人しておまへの事を話しをり候。かた時もお前の事忘れず候、毎晩お前の為に神に祈りおり、陰膳(かげぜん)は絶やさず候……下着一日ごとにとりかへなさるべく……耳のうしろなぞは洗い忘れる所故、よくよく気をつけて、いつも身ざれいになさるべくお氣にとめおき候ことなり……」といった調子です。

母はまた、こだわらない性分からでしょうか、家庭内のあらゆる出来事、父との間の微妙な感情問題や、意見の相違なども、ベラにはすべてを実に率直に打ち明けていますので、手紙の文面を読んでいると、15歳や16歳の少女に、こんな難しいことまで知らせてと、びっくりするほどでしたが、逆にそれほどまでにベラを信頼し、むしろベラに甘えていたかも知れないのです。弟妹のことなども細々と報告し、早くベラが戻って、母を手伝って弟妹たちを教育してくれ、到底、自分には手におえない重荷であるから、と切々に訴えています。このような母の信頼がますますベラをふるい立たせて、い

っそう勉強に精励し、早く一人前になり、日本に戻って母を助け、父の力になろうという決心を固めさせるのでした。

ベラは又、母の手紙が綿々としたぐちや、苦勞ばなし、果てしない嘆きに満たされているのを読むごとに、考えないではいられませんでした。もし母が祖母のように神を信じる人であったなら、もっと耐え忍ぶこともたやすく、もっと感謝をみつける楽しい人生になるのではなからうかと。自分が日本に帰ったならば、何をさしおいても母をキリスト教に導かねばならない。母が慣習的な意味で何時も使っている「神や仏」を脱却した真理・真実を探求させなければならない。それが自分の第一の使命である、と心を決めるベラでした。

明治 34 年 (1901) 6 月 6 日、ベラはマダム・サトンの女史寄宿学校を首席で卒業します。日本を出て満 5 か年と 9 か月におよぶアメリカ留学の間、学問的にはもちろん、身体的にもベラは少女から淑女へと成長しました。

わけても、ベラの全生涯を通じての最大の収穫が、この時期に与えられたのです。それはキリスト教の信仰を得たことでした。白紙のような純真な魂に、祖母により、又マダム・サトンによって、ピューリタンの深い信仰を植えつけられたベラは、12 歳で渡米した時とは天地の差の変身をとげました。身も心もです。美しい 19 歳の淑女となって故国、日本の土を踏んだのでした。

ベラは帰国すると早速、母をキリスト教に導くことから始めます。心をこめて祈り、諄々と説く、若き伝道者の熱意は見事に報いられたのです。

母のキリスト教信仰への転換は、母の周囲の日本人たち、その親族たちにも深い影響を与えます。武智家をはじめ、母の生家・林家の人たちも皆、キリスト教に帰依するのでありました。

IV ベラの修業時代

1-1 伊香保にて／子どもたちとの出会い

アルウィン家では、次々と生まれて来る（ベラ以下六人の）子どもたちの健康上、湿気の多い日本の夏のために、東京近郊の保養地を探していました。折から以前より親交のあった井上馨侯爵の紹介で、よい温泉も湧くからと聞いたロバート、大の温泉好きの彼は早速、伊香保の地へ出かけてみますと、伊香保は、背後に霊峰榛名山を負い、榛名湖から流れ出る清冽（せいれつ）な川に沿った町で、周囲は広大な丘陵地帯で、幽邃（ゆうすい＝静かで奥深い）な森林の中に豊富な温泉が湧き出している場所です。一見して気に入ったロバートはすぐに手を打ち、この地を買収したのです。

ベラは毎年、3 か月ぐらいの間（7, 8, 9 月）を伊香保で過ごしました。父のロバートに似て、ベラも無類の温泉好きでした。しかし伊香保は温泉の他にも沢山の魅力を持った所でした。第一は伊香保の自然です。山あり、川あり、溪谷あり、湖あり、滝あり、森林あり……。静寂で豊かな自然、月や星も伊香保で見ると美しく、朝夕の霧のたたずまい、雲の流れ、朝やけ夕やけの重畳の山肌に映る素晴らしさ。ベラは、榛名の山裾（やますそ）のこの地の自然美をこよなく愛したのです。

ベラは伊香保にくと、朝早くから別荘の附近を散歩して、飽かず自然の中に溶けこんで暮したのですが、その彼女の散歩は、いつしか町の子どもたちとの出会いの場となるのであります。幼い子どもたちは、美しい異国の人を好奇とあこがれの目で眺め、ひきつけられるようにベラの周りに群がり、その後をついてまわるようになります。

このような素朴な子どもたちとのふれ合いは、東京の生活では一度も味わったことのない、目新しいものでした。元来が子ども好きのベラは、いつしか自分の方でも子どもたちを求めていることに気づくのです。そしてその

うち、彼らの群れを自分の別荘につれ帰り、おやつを与えたり、お茶を飲ませたりという関係になり、やがてはベラが誘わないでも、子どもたちの方から別荘に遊びにくるようになりました。

東京でのベラの毎日は、母の手伝いと、父の秘書がわり、弟妹のしつけ係の他に、自分自身の勉強やけい古事に目まぐるしく、大変なハード・スケジュールの生活でした。そしてその間に、何となく彼女の結婚に寄せる両親の期待が重苦しい圧迫を、ベラに与えるのです。親戚同士や召使たちの煩雑な用事も半分は、母から肩替りさせられてしまっていて、時々にはあまりの息苦しさに彼女はたまらなく逃避したくなる。その逃避する所が伊香保なのでした。平和な、簡素で純朴な思いで暮せる伊香保へ行き、何もかも一切を忘れていたい、ベラは東京で伊香保を恋うるのでありました。

ある夏の日、また何時ものように伊香保へ父母とつれ立っていき、なつかしい子どもたちと再会して、さそったり、さそわれたりの散歩が始まりました。時を経て、背の高くなった子もいれば、小学生になった子どももあり、泣き虫だった子がしっかりしてきたり、又病気になって遊びに来られなくなった子もいます。子どもたちの生活にもそれなりの変化が起こっている。そんな子どもたちを眺めているうちに、ただ遊んだり歩いたりだけでは済まないような、それだけでは物足りないという思いがベラの心に芽ばえてきました。そして自分が14歳の夏の間、フィラデルフィア郊外の湖の畔で祖母と過ごした、生まれて初めてといってよい、充実した日々の思い出が甦ってきたのです。

あのなつかしい思い出の、毎日の充実感は何処から来たものであったろうか。生きていることが嬉しくて、たしかな満足を中心から感じた毎日。それは祖母の愛によって与えられたものでもあるが、それだけではなかった。きれいな湖畔の空気、おいしい食事、たのしい遊び、やさしい言葉、それらも勿論だが、もっとそのようなものとは違った、心を高め、魂を成長させてくれたもの。人間を愛し、人間の力の限界を知らせ、人間を創り給うた大いなる存在に心づかせられたことではなかったか。そのことにベラが気づいた時、

ハッとベラの心が開かれたのです。この純朴な、無垢な子どもたちに神の存在を知らせて、彼らの行末の行路に役立たせなければならない。神の愛を知らせて、長い人生での希望と慰めになるように、彼らの人生の道標を与えなければならない。それが伊香保の子どもたちに対するつとめである、と考えたのです。

早速、父に相談しました。父は多少の危惧は持ちながらも、承諾してくれました。母は双手をあげて賛成し、力の及ぶ限りの援助をしようと約束をしてくれました。

ベラは別荘を開放して、子どもたちのキリスト教伝道(日曜学校礼拝)を開始したのです。ベラの S. S. (Sunday School) は、伊香保においては日曜ばかりでなく、夏休み中は、小さな子どもたちのためにほとんど隔日のように開かれました。

クリスマスには、万難を排して、母といっしょに、寒風が吹きすさび、又雪が舞い、樹氷のならば伊香保へかけつけ、子どもたちと色々な行事をしてお祝をしました。

来る夏も来る夏も、ベラが足しげく伊香保に通い、日本の田舎の子どもたちにふれ、キリスト教の伝道に一心にうちこみ、楽しい時を過ごしている間に、その心の中に一つの声が、かすかな細い声が聞こえてきたのです。伊香保の子どもたちの、中でも特に幼い子どもたちが、不思議に自分になつくことを発見したのです。子どもたちといっしょに別荘中を走りまわったり、山の澄んだ空気の中で子どもたちと心おきなく大声で叫んだり、歌ったりしていると、そのことがベラには心から楽しいのです。子どもたちとベラが一心同体のように何でも通じ合うこと、ベラの心のままに子どもたちは自然に動いてくれること、これはベラ自身には思いもかけない発見でした。これは一体どういうことなのだろう。なぜ私は今こんなにしあわせなのだろう。ベラは聖書を開いて尋ねていたものを探し当てるのです。

『その時、弟子たちがイエスのもとに来て言った。「いったい、天国では誰が一番偉いのですか」すると、イエスは幼な子と呼ばひ寄せ、彼らのまん中に

立たせて言われた。「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国に入ることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国で一番偉いのである……」』（マタイ伝第 18 章）この聖句は、ベラの心に沁み出た、心の奥から囁きかける細い声の解答でもありました。

後日、ベラは追憶して語っています。「伊香保にパパが別荘を持ったこと、それがもう、私に対しての神様の愛のご計画だったのです。伊香保の子どもたち、親切な町の人たち、美しい自然、神様の恵みでなくて何でしょう。伊香保こそ、私のカナンの地でした。伊香保が私の人生の第二の誕生地なのです」と。

1-2 伊香保にて／幼児教育への開眼

明治 37 年（1904）日露開戦の年の暮、フィラデルフィア市に住む、ベラの祖母、ソフィア・アラベラ・ベイチが逝去したとの報せが、はるか太平洋の彼方から届きます。89 歳の高齢でした。

父、ロバートはもとより、ベラの悲嘆は限りないものがありました。いろんな想いが頭をよぎります。とくにベラがマダム・サトンの学校を卒業して、迎えにきてくれた父と共に日本に帰る日の感動的な別れの場面が。病床に侍すこともなく、最後の訣別も許されず、永遠の眠りについた祖母を想い、ベラの胸は裂けんばかりでした。

日露戦争のすんだ頃（ベラ、23～4 歳でしたが）、ベラには色んな結婚問題が起こっていました。「ある有名な考古学者もその中の一人であった。しかし先方では矢張り混血児（あいの子）では困るというような反対が、ご本人以外の周囲にあって、その話は中止になったようだ。また三田綱町の邸に入りした、外交官を拝命したばかりの S 氏も幾度も来ていた。外交官は外国籍の女生とは結婚できないために、結婚は沙汰やみとなった……」という談話も残されています。

ちなみに父が勧める縁談は主として日本在住、在勤の外国人の若者たちで

した。一方、母や親戚たちからの候補者は色々な階層の、日本人だったらしく、学者あり、牧師あり、外交官あり、実業家あり、という状況でした。

ベラはそんな中で、心ひそかに悩み、また苦しみました。それは、結婚問題を一つの契機として、（この混血の）自分がこの人生を、どう生きていったらよいかということです。このまま、富裕な現在の生活、上流社会の子女として、安楽な毎日を送って、成り行きまかせに生きていくのか。それに自分は満足していくのか。彼女は自問自答し、自分の心の中を直視します。そんな日々の中で、何時からかあるかすかな光が差し始めていた「一筋の白い道」、それは伊香保での生活の中から生まれ出たもの、子どもたちとの接触から得たものでした。自分で自分に驚いた才能の発見、「それは生まれつき与えられていた天性とも、天分ともいってよいもの」でした。幼児と一緒にいる時の心の高揚、何もかも忘れて幸福でいる自分。子どもには人種差別的なもの、階級差別的なもの少しもない。ただ慕い、なついてくれるお互いの心の交流の、説明し難い暖かさ。この世界以外に自分の生きていかれる道はない、と固く自覚したのであります。

それでは、自分はこれからどうすればよいのか。子どもを本質的にどれだけ自分は知っているのか。ただ可愛くて、いとしくて、遊んだり抱いたりしていて何になるだろう？ 子どもの心理、子どもの生理、身体的にも精神的にも、何をどのようにしてやれば子どもの要求にも合致し、教育的にも、信仰的にも、子どものためになるのだろう。ベラが痛切に自覚したことは、自分の無知、無経験、手も足も出ないという実感でした。勉強しなければならない。研究しなければならない。経験しなければならない。子どもに関してのすべてを極めなければ、子どものよい友にはなれない。単によい友だけではなく、最良の友になりたい。どうすればなれるか、3年かかって5年かかって、専門的な学問と、専門的な技術をマスターして、自分に納得ができ、自信を持てるまで勉強しようと、覚悟したのでした。

では、どこで、何時から始めたらよいのか。たった今だ。たった今から、そしてやはりアメリカに行く方がよい。日本よりもアメリカは、自分を鍛練

する場所として向いている。甘えるものや、気をゆるす場のない所に、自己を投げ出すべきだと悟ると、すぐに両親を説得し始めたのです。粘り強い断固とした説得、ベラ一流の辛抱強さ、それは強引ともいえるやり方で始まったのです。

「私はもう暫く結婚のことは考えられません（全然しない、ということは母に対してあまりにも気の毒だったから、一応あいまいな形にしておいた）。伊香保の子どもたちが私の心の目を開いてくれました。私は幼稚園の先生になって何時も子どもと一緒にいたいのです。私は一生懸命に、子どものための専門の勉強をして、よい先生に、そう最良の先生になりたいのです。そして子どもに神様を知らせ、子どもを通してその親御さんたちにも、神さまの存在を知らせたいのです。その勉強にどうぞもう一度、私をアメリカにやって下さい。ベラの一生のお願いです」

当時のアルウィン家では、大勢の子どもをアメリカに留学させているので、経済的な父の負担は、毎月莫大なものでした。ベラにもその事情はよく判っていました。それで自分のためには最小限度の学費でよいから、ぜひもう一度だけ出してもらいたい。自分は衣服も住居も食事も、最低のもので我慢する。小づかいも及ぶ限り節約をして窮乏に耐えるから、専門的な学問や、研究だけを是非させてもらいたい、と心をこめて両親に願い出たのです。

母は驚き、激しく落胆しました。そして嘆き悲しみました。「何故お前さんは、適当な結婚をして母を安心させてくれないのか。お前は母を捨てる気なのか」と、何としてでもベラを思い止まらせようとしてしました。けれど、ベラの決心は固く、哀訴にも、涙にも、おどしにも心を動かさませんでした。最初に父が折れました。父の姉妹たちがアメリカで現在、女子教育にたずさわっているので、母ほどのショックはなく、諦観し許してくれました。父の賛成で百万の援兵を得たベラは、ことばを尽くし、愛をこめて母を説得し、慰めました。

「私はママを命ある限り捨てません。私は一生ママと一緒にいますよ。私

はママのお国の日本の子どもたちのお友だちになろうとして勉強にいくのです。今ママの所から出ていくのは、ただその勉強を身につける間だけなのです。一生懸命に、できるだけ短い時間で、知識や技術をマスターしてきます。そして今度帰ってきたら、それは永久にママの所にいることになるのです。わかって下さい」

幾日、幾夜かの母娘の話し合いの結果、ベラの決心の並々でないことを理解した母は、とうとうベラの願いを受け入れざるを得なくなったのでした。

「早く別れば、それだけ早く会う日が来るのだ」と悟った母は、今度は積極的に働き出し、ベラの支度に取りかかるのでした。

2-1 プロフェッショナルへの道

／アメリカ留学～伊香保・日曜学校事件

明治 39 年（1906）11 月 5 日、横浜出帆の日本郵船・天洋丸で、ベラは再留学の途につきました。新しい目的を持った旅立ち、きびしいプロフェッショナルへの道を目指した出発です。

ベラが幼児教育の専門家になるために、再留学にふみ切るまでの心の過程で、その中核を形成したものは「混血」という桎梏（しっこく/手かせ足かせ）によるものでした。今でこそ、さほど珍しい現象ではありませんが、明治時代にあっては、それは現代とはまるで隔絶した大変な問題性をふくんでいました。ベラの生き方を左右したものの根本に、この「混血」という事実があることに目を覆ってはなりません。現代でさえも、おそらくどの国にも、抜き難い人種差別は跡を絶^たっていないと思われます。

後日、ベラ自身、淡々と次のように述懐しています。「言い表わすこともできない両棲類的なコンプレックスが私の心にあります。私は日本にいても純粋な日本人でいられないし、アメリカにいてもやはり、純粋なアメリカ人ではいられなかったのです。どっちにも属さない不安定な感じと戦うのに、時々私はつかれ果てました。私の祈りは、そんな時、果てのない、グチと嘆きのくり返しなのでした。キリストを知らなかったら、多分私は自殺

したかも知れません」と。賢いベラは、鋭敏にあらゆる雰囲気を感じ取っていたのです。特に結婚問題に関しては、表面的な外交辞令の裏に、根強く流れている反感や、嫌悪を、ヒシヒシと察知し、そのことが誇りの高いベラの心を、第三者の想像以上に深く傷つけさいなんでいたのです。

一方、キリスト教的ヒューマニズムの立場から、この問題は、ただベラ一人個人が受けた「不当な仕打ち」や「失恋」などといった感傷（センチメンタリズム）では済ませられない、人類全般にかかわる不合理な、苛酷なこととして、小さな胸は、やり場のない怒りに燃え立つのでした。ただ、この問題をつきつめて言い出せば、父母の結婚に到達することを知るベラは、自分の苦しみを決して両親に知らせまい、とくに母にはどんな犠牲を払っても、絶対に悟らせまいと固く自分に誓ったのです。ベラは母の前では、自分は「混血（あいの子）」などということは、歯牙にもかけていない、という身振り（ゼスチュア）を演じてみせました。

一つには、長妹のメリーが時々発作を起こし「ママは何故、私を生んだの。私は産んで欲しくなかった」と狂暴に母を責め苦しめ、父や弟妹を、そして家庭全体を、暗い救いようのない状態に追い込んでいたので、なおさら、母のためにベラは、自分の心の苦悩や闘争の片鱗さえも見せないよう、歯をくいしばって努力していたのであります。

ベラ自身は留学にふみ切った時、一切の思いを断ち切って、「自分は一生涯結婚はしない。自分の肉体も精神もすべてを神に捧げ、み心のままに生きよう」と決心しました。そして自分の生涯を「幼児の友」として生きる、という目的を与えてくれた神に感謝し、その原動力となった伊香保の子どもたちに感謝して、そして自分の決心を許してくれた両親にも感謝して、よろこびを胸一杯にかかえ、横浜から船出したのであります。

フィラデルフィアの伯叔母たちのもとに旅装をといたベラは、休む間もなく彼らの助言・紹介をえて、（フィラデルフィアの）街を東奔西走して目的の勉強にとりかかりました。まず叔母ソフィアの紹介で、特別な契約を得て大学課程の各科目の個人教授を受ける外、フィラデルフィア市のドルクス化学

栄養学校で1か年研修後、明治42年（1909）からはカロライン・ハート女史の経営する幼児教育専門学校で以下のような科目を学びました。

○心理学（教育心理学・児童心理学・一般心理学・社会心理学） ○教育学（一般教育学・児童教育学「フレーベルの教育学」・社会教育学） ○歴史学（教育史・文学史・美術史・人類学史） ○博物学（動物学・植物学・生物学） ○聖書学 ○衛生学（児童衛生学・社会衛生学） ○童話学（童話史・童話考察・童話創作） ○音楽（個人教授） ○体育（個人教授） ○工作・絵画・彫塑（個人教授） ○各種実習（幼稚園，保育所，セツルメント）

明治43年（1910）春、イタリアのローマで世界日曜学校大会が開催された折には、夏季休暇を利用して、全米 S. S. 関係者共同の団体に、ベラも友達と一緒に加入してローマに向かいました。8月はじめ、ニューヨーク港を出発、4週間の船旅の後、9月3日ローマ市の大集会場には、世界各地から集めたキリスト信者の群れ、そこには地球上のほとんどの人種が参加し、「汝の若き日に、汝の創主（つくりぬし）をおほえよ」の標語の下に、同じ神の前にぬかずき、幼き者、若き者たちへの伝道の使命に燃え、献身を誓うのでした。S. S. のあり方を、思想面からも、技術面からも、先輩の尊い体験を教えられ、研鑽と激励を与えられ、ベラは大きな刺激と感銘を受けました。5日間にわたる勉学と行事をすませ、ローマの旧蹟巡りのグループに加わり、古代文化の遺蹟を目を見張りながら見学したのです。この大会でベラは、ヨーロッパの息吹にふれることが出来ました。歴史と伝統に根ざす重厚な雰囲気です。そしてこの大会中、その参加者の中に「新教育法」で高名な（ベラの深く傾倒する）モンテッソーリ女史にも逢うことが出来ましたし、ベラが大いに心酔してその研究を志している「フレーベル」のフランクフルト（アム・マイン）の「ペスタロッツ・フレーベル学園」の教師たちとも交友を深めたのであります。

明治44年（1911）6月1日、ベラはミス・ハート・トレーニング・スクールを優等賞を受けて卒業。ここに幼児教育への公の資格が認可されたの

です。

ベラはローマの S. S. 大会出席の時から一つの理想を、その心に形づくり始めていました。それは伊香保のことでした。日本へ帰ったならば、父の伊香保の別荘を改造ないし増築して、あるいは広い庭園の中の樹を移植して空地を作り、幼稚園を開こう。そこに最初は小さく、やがて将来は、幼児教育のメッカとなるような教育センターを建てたい。志ある人も参加してくれようし、伊香保の人たちも援けてくれよう。榛名山麓全体の地の幼児たちのために、幼稚園、セツルメント、農繁期の乳幼児委託所も作ろう……町も村も、やがてはキリストの教えに包まれて、伊香保の地は、日本の中の「地の塩」のような存在になるだろう……ベラの夢は大きくふくらむのでした。

ベラが足かけ 5 年間、日本を留守にしている間に、留守宅にも色々と紆余曲折がありました（住居も再々転じた）が、ベラが帰国した頃（1911 年）、伊香保では思いがけない騒動が起こっていました。幾年も前からうっ積していたものが、遂に噴出したのです。いわゆる日曜学校事件（明治 45 年）です。学校側が、日曜日に児童がキリスト教会に出席するのを止めさせようとした事件であります。

アメリカから楽しい希望——伊香保の地に幼稚園を開設し、児童館・セツルメントなども建設して、伊香保を幼児教育のユートピアにしよう、という希望——を抱いて帰ってきたベラを待っていたものは、この伊香保の日曜学校の問題でした。ベラの驚きもさることながら、この日曜学校問題の起こった理由は沢山ございました。

- ①日本は神国で、万世一系の皇室を戴いている。天皇は人にして人にあらず、活神である。キリスト教は異国の神であり、その説く所によれば「人間は皆平等に創られている」という。皇室は人間以上であり、天皇は我々庶民と同じ人間ではなく、神の子孫であるからキリストの教えと矛盾する。

- ②町にも村にも先祖代々、氏子の神社があり、先祖代々の墓をあずけてい

る寺がある。キリストを信ずれば、神社や寺を捨てねばならないが、それはとんでもない事である。

③キリスト教では酒もタバコも禁止するという。伊香保のように人々が慰安を求めに来る湯治場で、酒・タバコがだめとなったら伊香保はさびれてしまう。子どもたち即ち後継者たちがヤソになってしまったら、皆いつか家業を捨ててゆくだろう。そんな事になったら大変だ。断固としてキリスト教に反対である。

④キリスト教は「汝の敵を愛せ」という。平和、平和という。しかし、このせち辛い世の中で汝の敵を愛していたら、自分が生きていられない。また戦争をしてはいけない、というが、戦争で戦ったからこそ(明治37, 38年日露戦争)、日本は世界の列強国の仲間入りができたのだ。キリスト教は日本の国体に反している。

⑤キリスト教では、人類は平等だ、というけれども、そんなことはない。金持ちがあり、貧乏人があるではないか。権力者があり、無権力の者がいるではないか、健康な人あり身障者があり、秀才がありバカがいるではないか。本当にキリスト教の神が人を平等に創ったのなら、こんなことはないはずだ。

その他にも⑥日曜学校の生徒は生意気である、⑦学校の教師よりも日曜学校の教師を尊敬し、親どものいうことよりも、日曜学校の教師のことを重んじる。⑧用事を命じて、日曜日には日曜学校へ行ききたがり、怠け者になる、等々々。日曜学校反対の条件は数限りなく、後から後から出てくるのでした。

ベラは母の生国ながら、今さらのように日本の国柄、日本人の考え方におどろきます。自分がいかに世間知らずであったか、日本人や又日本の国柄の実態を知らなかったことか、と反省させられ、同時に日本の官吏や地方の官憲の権力の強さについて多くのことを学んだのでした。国粹主義、尊皇攘夷、封建性などのメンタリティについて開眼をし、そして自由なアメリカ的

な考え方では、切り抜けられぬ壁の厚さにひたすら驚き、恐怖しました。

伊香保の問題に対して、(父は中立)、母は心から失望落胆して嘆き悲しむばかりでした。さすがにベラの父は慶応2年から来日して、各地方や、各階級の人たちと広く交わりを結び、日本の伝統や風習も、ある程度見きわめていたので、今度の伊香保の事件も、第三者的に平静に眺めていて、このような成り行きになるかも知れない、とひそかに心配していた、ともらすのでした。また内村鑑三がキリスト者の立場から反戦を叫んで迫害されたことや、第一高等学校を追われた事件などにも彼は深く心を痛め、日本の国には、キリスト教は根をおろし得ないのではなかろうかと危惧していたのであります。

ベラ自身は、希望を捨てることなく何とかしてこの国にキリストの救いを広めたいと祈る思いでした。ただ現実的に、か弱い女の自分には、なすすべを知らぬその無力感と、自分のあまりにも微小な力への絶望が先に立ち、自分のような者は、やはり生まれて来なければよかったのではないかと、自分は伊香保の子供たちに対して、大それた、悪い事をしたのではないかと、悶々の日は虚しくすぎ去り、いつ果てるやも知れぬ苦しみの毎を送るのであります。

明治45年(1912)明治天皇がご崩御。そして、かの乃木希典大将夫妻の殉死事件。在日外国人たち(ベラを含めて)に一樣に衝撃を与えたこの出来事と共に、明治の幕は下ります。日本国や日本国民にとり、何という多事多端な明治時代！ベラという一人の人間にとっても、誕生から成人までの〈多端〉な時代がこの時、終りを告げ、新しい大正時代が到来したのであります。

2-2 プロフェッショナルへの道／再起・復活～ヨーロッパ留学

伊香保町にかけた幼稚園設立の夢は、若いベラの力ではいかんともなし難い障害によって無残に碎かれてしまい、言いようのない哀しみと、挫折感におそわれ、しばらくの間、ベラは虚脱したかのような状態でした。けれども

その打撃も、ジッと胸一つに受けとめ、必死に耐えている中で、やがて眼を外界に転ずることによって、徐々にではあるがその痛手から回復しはじめました。

アメリカでプロたるべく、懸命に勉強していた日々に、何時も胸深く抱いていた願望、自分は必ず本当の意味の良い幼児教育者に、第一級の幼児教育者にならなければ、との熱烈なその願望が再び燃え上がり、今くじけてはならないのだ、と自身を励ますべらでした。

ローマのモンテッソーリ女史の優しい誘(いざな)いの言葉、フランクフルトの「フレーベル学園」の研究学生たちグループの真剣な研究態度、それらの思い出が今さらのように鮮明に甦ってきて、伊香保問題で悶々の日を送っていたベラにとって、「一つの挫折で終ってはならない」「日本には伊香保の地ばかりが、子どもの住む所ではない」と考えることによって、やっと立ち直れたのであります。

パパの別荘という特別なものに依存した、根本的な自分の甘さ、自分は自分一人の力で、自分にふさわしい所で働きを始めるべきであった。父の財産を当てにし、町の人々の好意に甘えかかって、それで何かをしようとした自分の思い上がりを反省したのです。もう一度、この思い上がった自分を鍛え直さねば駄目だ、と痛切に考えたのです。ヨーロッパの空が自分を呼ぶ。フレーベルの研究仲間が自分を呼ぶ。それは立ち直ろうとするべらにとって、新しい希望と甘美な喜びを湧かせるものでありました。

母は、ベラと一緒に伊香保事件では、嘆いたり失望したり悲しんだりはしたけれども、毎日、身近くベラを置き、その顔を見ていられることでは、この上もなく満足でした。その母を喜ばせるためにベラは、伊香保問題にはサラリとした態度を取りました。時間を割(さ)いては、母と一緒に親戚・知人の宅を訪問したり、買い物のおともをしたり、祖父や曾祖父の墓を訪ねたり、つとめて母と同行して親孝行をしました。家では母を手伝って客の接待、召使たちの世話など、まめまめしく奉仕しました。そしてその間、折があれば日本の幼児教育の現状を知ろうとして、出来る限りの資料を集めまし

た。教会員の紹介や、ミッシェンのつてを求めて、キリスト教関係の幼稚園、公立幼稚園の見学を一生懸命に始めたのです。お茶の水付属・学習院付属・竹早師範付属・番町小学校付属を始め、霊南坂幼稚園・雙葉幼稚園などのミッション系のものや、仏教関係の幼稚園、篤志家による幼稚園などです。またモンテッソーリ女史の影響から、特殊養護施設盲学校、ろう啞学校、孤児院、母子ホーム、託児所、そして板橋にある養老院までも見て歩いたのです。

ベラは母に、日本の幼児教育を視察した結果、まだまだ自分には、「あるべき」幼児教育者としての勉強が不十分である、ということ告げ、もっと深く勉強し、研究するためにはヨーロッパに行く必要があることを説き、母はそれを諒承いたします。

1913年（大正2年）の春、ローマのモンテッソーリ女史から、感覚教育のための国際コースを開講する通知がベラの所にとどきました。1914年2月から開始される、というものです。飛び立つ思いでベラは、早速入所手続きを取りました。それと共にドイツ訪問を計画し、マリエンタールの古い城趾に建つフレーベル学園へ、滞在要請の電報を打ったのです。

6月15日、神戸港を出帆した日本郵船のエジプト航路の船客となったベラは、以下のような旅路を経て〈神戸—上海—香港—シンガポール—ボンベイ（インド）—（アラビア海）—（紅海）—〔シナイ山脈の姿を望みつ〕、（スエズ運河）—アレキサンドリア（エジプト）—カイロ〔ピラミッドやスフィンクス、カイロ博物館を見学〕—（シチリヤ島）—マルセイユ（上陸）—スイス国—（ドイツ国境）〉「フレーベル学園」へと到着します。

フレーベル学園での聴講は3か月半（15週）でした。フレーベルの主著「Education of Man」の哲学的・教育学的考察や Gift（恩物—おんぶつ—）の研究、レポートや感想文・実習記録 etc. の提出・指導、夢のようにすぎた聴講期間。かくてグループの人たちへ別れを惜しみながらマリエンタールを後にしたベラは再び、スイス国境をこえ、アルプスを横断してイタリアのローマに到着したのは12月初め。開講の日まで、懸命にイタリア語の勉強

に取りくむベラでした。

1914年2月から6月30日まで、待望のモンテッソーリ新教育の講義と実習。モンテッソーリ女史は46歳の働き盛り、ベラは32歳、自分の生涯を日本の幼児のために捧げようとの熱意に燃えての留学であります。

「我はむしろ冷たからんか、熱きを望む。生ぬるきことよりは」「目指すは、ただ Best のみ、Good にも Better にもあらず」これはベラの座右の銘でした。ひたすらに最良を目指しての勉学でした。

感覚教育の理論、それはモンテッソーリ女史の場合、精薄児によせる絶大な「愛」から出発した教育治療学の発展したものでありました。それは精神と感覚の相互統一と相互発達が、教育の根底であることを教えます。詳細は省略しますが、モンテッソーリ新感覚教育のエッセンスを、ベラは日夜たたき込まれたのです。講義と実習と統計作成とに明け暮れた、何にもたとえようもない充実した、それは肉体労働にも匹敵する講習コースでした。すべてのコースを満足に完了し、6月30日にベラは卒業、その証書を手にしたのであります。

「一つの信念と人生目標を持ち、その仕事に専念している人間は、その人全体が輝くように美しく見えるものです。ヘレン（アメリカ、ダルトン市のヘレン・パーカスト女史、ダルトン・プランの実施者）とモンテッソーリ先生が楽しそうにお話している姿を見ていて、何とお二人とも美しく、和気あいあいに見えたでしょう。私は羨ましくてたまりませんでした。忘れることの出来ない思い出です」ベラは後日、ローマ当時を回想して、以上の述懐を（くり返し）語るのでした。

帰路、フィレンツェで美術館見学（ベラの好きなレオナルド・ダ・ビンチの絵を始めとして）、次いでジェノバーミラノーコモ湖—モンブランの山麓—ジュネーブ—リヨン（フランス）—パリ—ポーツマス—ロンドン〔ロンドン塔、ウェストミンスター寺院—大英博物館—ロンドン市立幼稚園（数か所）—エディンバラ〔古城趾、広い牧場、奥深い森林、紺碧の湖、エディンバラ大学、等〕—グラスゴー—ニューヨークへ。

アメリカでは9月第2週から開催されたボストンの汎アメリカン新教育研究会に出席しますが、これはイタリア出発時から彼女のスケジュールのポイントでした。研究会終了後、ベラはフィラデルフィア市の伯叔母たちを訪ねて、お互いに無事をよろこび合いました。なつかしい従姉のアニー（マダム・サトン）は老齢で、病床を離れられない状態でしたが、ベラの来訪を涙を流してよろこび、ベラが目的達成には少しも節をまげないことをほめました。ここで初めて、伯叔母たちやアニーも、ベラから、彼女が結婚を断念し、一生涯独身で幼児教育に生きようという決心を打ち明けられたのであります。

V アルウィン学園の創設

大正3年（1914）11月初旬、ベラは1年半にわたるヨーロッパ留学の旅を終えて日本へ帰りました。大戦勃発（はっぱつ）で風雲ただならぬヨーロッパから、余裕をたたえたアメリカを経て、戦争の気配すらない日本の土を踏んだベラですが、旅の疲れをいやす間もなく両親に、学園を創設したい希望を打ち明け相談しました。幼稚園と、保育者の養成機関です。母の心には、まだベラの結婚を望む思いが捨て切れないでありましたが、父は、自分もう引退の身だから、決して表面には出ない。お前が自分の力でやる気なら、やってみたらよかろう、といってくれました。

かつて伊香保の父の別荘を根拠地とし、町の同信の人たち、S. S. の生徒たちを中心に、町の内外に働きかけ幼児教育の理想郷（ユートピア）を作り出そう、とのベラの空中楼阁は、日本の国民性に根ざすキリスト教排斥の現実直面し、もろくも崩壊してしまっていたのですが、あの骨身にこたえた挫折感、それを思うにつけ、今ふたたび幼児教育に着手しようとする現在、ともすれば理想に走りがちな自己を制御し、まず「おのれの分にふさわしい計画」を自分の目標としました。自分を支えてくれる一心同体の夫もなく、地位も金もない、若い独身の混血女性が徒手空拳で、ただ信仰と使命感に燃え

て立ち上がろうとしていました。この上は、たとえどんなにささやかな形であろうと、一心をこめてやり始めよう。自分の持てるものすべてを投入し、日々を神にゆだねようと決心したのであります。

父から与えられる月々の小遣いの一定額のお金（および年に幾回かのボーナス（特別手当）のようなもの）と、母から与えられる被服・装身具類のお金（勿論、当時の日本人の常識から考えれば、それは少ないものではなく、真珠の首飾りの数個分、振袖や綴錦の帯が造作なく作れるほどのもの）、それだけが、ベラの仕事に注入できる資金のすべてでした。けれどもベラには、第2回留學時代から自分の衣服・装身具類は、最低の質素な物で済ませる習慣がついていました。（注：この習慣は終生、変らず続けられた。丈夫な長持ちする布地、古くなれば切ったり継いだり、一枚の服で何十年も着続けた。丈夫な、ただ耐久性だけを考えて靴、すべてそれらは、幼稚園と保育学校のための犠牲なのであります）

そこで先ず、自宅の近くに手頃な建物を見つけ、肝心の幼児たちは、すぐ自宅の隣家と近辺に見出しました。ちょうどフレーベルがそうして始めたように、ごく少数の幼児たち、ごく小規模な教育の場を持つことから始めようとしたのです。

ちなみに、彼女はある講演「幼児の教育」において、その信条を次のように語っています。「よい教育は、よい教師があつて始めて実現できる。そのためには各自が〈Better〉の保育者で満足してはならない。どの方面においても〈Best〉を目標として精進することが、保育教育者の絶対にもたねばならぬ良心である」と。

このようなベラが、学校の設立に当たって、第一に考え、実行したことは（その信条に即して）、立派な校舎ではなく、新式の設備でもありませんでした。大勢の園児や生徒の募集では勿論なく、その第一が教師陣の整備でした。次いで最も身近な、最も親しい、ほんの数名の幼児の確保だったのであります。

ベラが三顧の礼をつくして招聘した教師の主な方々は以下のようでした。

○心理学：文博・松本亦太郎（東京帝大教授） ○児童心理学：文博・田中

寛一（東京高師教授） ○教育学及び教育史：文博・檜崎浅太郎（東京高師教授） ○博物学（動物・植物）：平島権蔵（東京女高師助教授） ○保育衛生学：医博・宇都野研（宇都野病院長） ○談話学：久留島武彦（早蕨幼稚園長） ○絵画及び美術史：赤津隆助（青山師範教諭） ○彫塑及び陶芸：板谷波山，吉田三郎（帝国美術院会員） ○木工：菊地俣（木工技術家） ○音楽（ピアノ及び声楽）：原みち子（上野音楽学校教授），渡辺トリ（上野音楽学校教授） ○数学：上野いし（女子学院教諭） ○体育：メリ・H・マクロイ（米国オーバリン大卒） ○生花：鈴木健太郎（清芳流家元）

以上の諸教師が保育学校創立当時の教授陣です。ベラの信条「最良の教育は，最良の教師による」の実践であります。

大正 5 年（1916）2 月，麴町区土手三番町に借り受けた民家で，ベラ年来の夢であった幼稚園と保育者養成の学校とがスタートしました。狭いながらも，一軒の家を確保し，満足すべき教師陣を確保したベラは，正式に学園の創設手続きに取りかかりました。先ず，その名称ですが，早くからベラの心の中に形づくられていたアイデアがありました。フレーベルの Gift（^{えんぶつ}恩物）の最初に取り上げられた「球」（マリエンタールの学園でのディスカッション）がそれでした。というのはフレーベルの思想としての〈完全な形態，宇宙の基礎形態の完全なもの〉と考えられる数学的な意味とは異なる立場から，日本には古来，一つの思想としての〈球・珠・玉〉の考え方があることに気づいたのです。「玉のような男児/玉のような声/玉音/玉座/掌中の珠/目に入れても痛くない珠/玉の肌」等のようなイディオムがあり，美しいもの，大切なもの，尊いものを表わしている。また「磨かざば玉もこがねも」という比喻歌があり，研磨することによってますます玉は完全になる，という意味をも伝えている。ベラは東洋的な思想の「磨いて磨いて完全な玉となる」という考え方に共鳴し，自分の学園の名を，宇宙の完全形態の基礎となる「球」に取りたい望みと，日本語の「珠」を表わす言葉との一致を発見してベラは喜びました。幼稚園児も，また保育養成者も，共に人格を形成して，美しく，めでたく，尊いものになる，という願いを込めて，両親と相談し，賛同を得

たので、「玉となる理想」〈玉成〉と名づけることにしました。

大正5年(1916)2月4日、東京府知事法学博士井上友一の許に、私立玉成保育養成所設立認可願を提出、許可されました。

なお、この学校設立には、ベラの父の陰の援助が大きな力となっていることも忘れてはなりません。父は在日知人のあちこちに紹介の労を取り、あらゆる所に秘かに手をまわして助けたのです。「玉成」の教師名はすでに述べましたが、設立時の顧問の名も記しますと、

○東京帝大医学部教授、医博・土肥慶三 ○貴族院議員、法博・高田早苗
○貴族院議員・田所美作 ○東京女高師名誉教授・中川謙次郎 ○東京女高師教授・倉橋惣三
○東京女子大学長・安井哲子 ○東京帝大教授、文博・松本亦太郎 ○宮内大臣、子爵・牧野伸顯 ○奈良女子高等師範学校長・楨山栄次(イロハ順)

大正5年度(第1回)生徒は11名、同園児は15名でした。その氏名は省略いたしますが、ベラの幼稚園に与えられた、この最初の幼児たち、「幼児の如くならずば、天国に入るを得ず……」と聖書に示された、そのいと幼き者。自分の天職として歩み出した現在、その最初の園児たちは神から与えられた者である、とベラは謹んで「どんな宝玉、珠玉にもまさる尊い宝物」として受け取り、心を尽くし、思いを尽くして相對しました。そして自分のプロフェッショナルとしての研究の蘊蓄(うんちく)を傾け、信仰と情熱をもって教育に従事したのです。

ついでながら、伊香保での打撃が身に沁みてしまったベラは、極端なほどの警戒をして、園児も生徒もすべて紹介者を必要とし、身許の確かな、信頼のできる人たちを通してだけ、受け入れました。年ごとに園児は、最初の園児の弟妹や、又父兄の紹介で数がふえていきましたが、ベラは自己のペースを少しも乱さず、15名以内に止めて終始したのでした。ちなみに、現在(1994年)の学校法人・アルウィン学園：玉成幼稚園・玉成保育専門学校(東京都杉並区松庵1-9-33)における園児は200名、学生数は150名とのこと

です。

時は流れて昭和 32 年（1957）5 月 29 日、ベラが奇しくも語った言葉は、彼女の終焉の言葉となってしまいました。

「神様のお声が、この頃、早く早く、と耳のそばで、何だかセカせていらっしやるようなのですよ。私はね、一生をふり返って本当に感謝です。私のような足りない、ろくでない者を、幼児教育の道へまっすぐに歩かせて下さったこと、本当にお恵みです。分に過ぎたご恩寵です。私に、もう一度人生が与えられましたら、私はね、喜んで又、この道を歩きますよ。ええ、ええ、二度でも三度でもね。私のこの感謝をよくよく覚えていて下さい。神様、有難うございます……」

そして彼女は、この言葉をいってから、5 日目の 6 月 2 日の朝、起き出して学校の廊下や保育室を見回り、窓のわくにホコリがたまっていることを注意して自分の部屋に帰り、再びベッドに登ろうとして倒れ、昏睡状態に陥ったのです。半年前、乳ガン手術のため入院し、そして退院したばかりの国立第一病院に再入院し、意識の帰らぬままに 12 日、遂に永遠の眠りに入りました。

彼女のあこがれて止まなかった「主」のみ許に、父や母や、弟妹たち、教え子、友人の待つ国へ旅立ったのであります。

ベラは生前、いくつもの「心に沁みる言葉」を残しています。その一つ（息吹き）をここに再録して故人のありし日の姿を偲びたいと存じます。

神の速度

ベラ・アルウィン

（金井うた謹記）

（前略）

私たちの住む地球は、創世された時から今日まで、長い時間が過ぎました。これから時々刻々時は過ぎていきます。時の早さを計るには地球が太

陽のまわりをまわる速度（これを地球の公転といいますね）地球自身がぐりぐりと一回転する速度（これを地球の自転といいますね）その速度を基にして、時計が作られました。そして早さの標準を時速ときめました。汽車の時速何キロ、自動車の時速何キロといって、距離と時間は計算されますね。また、パッと閃光が走ってから、雷の音がゴロゴロ聞えるので、音の速度より光の速度の方が早いということがわかりましたね。光は一秒間に地球のまわりを七まわり半走るということもわかりましたね。そして太陽のあたたかい光が地球へとどこまで、八分二十秒かかるのですよ。随分遠いでしょう。太陽系の星達はお互の間の距離を光の早さで計算することができます。光の速さにかなうものは今私たちのまわりにはみつかりません。ところが、宇宙を研究していらっしゃる沢山の学者の方たちが、太陽系の宇宙（これを銀河系宇宙といっています）以外の宇宙があって、その宇宙は、光の速度では計れないくらい早く早く、いまもどんどん動いているということを発表なさいました。どんな早さなのか何時かきつとわかる日がくるでしょう。でも私は、光の速度よりも、宇宙の速度よりも、もっともっと早く飛ぶものを知っています。私の所へおとずれる、やさしい、やわらかい、ほのかなもの、それはどこから、神様のみもとから一瞬の間に、どんな宇宙も飛びこえて私の所にまいます。私はそのおとずれの早さを、「神速」と名づけました。宇宙の学者や、生物学者や、化学者は、笑うでしょうか。いいえ、銀河宇宙のはて、全宇宙の外から、神速で私の所へきて下さる方たち、その実在を感じて、毎日暮していく私の幸福、嬉しうございます。

VI 朝河貫一とベラ

標記ご二人の運命的な出会いは大正7年（1918）1月、朝河氏がその愛する妻ミリアムとの死別5年後のことです。氏が日本の中世史研究のため、帰国（第2回帰朝）中の時でした。朝河時に45歳。一方、ベラはその2年前（大正5年2月）に、麴町土手三番町に夢の学園を創設、その玉成学園は

第3期生入学当初の頃です。ベラは当時、36歳でした。

その後、7年にわたる両者間の（特に朝河側における）悲恋物語は別稿^(注)にゆづりますが、この二人は奇しくも同じ明治28年（1895）に、新しい世界へ飛び立とうとしていました。同年、朝河（21歳）は7月10日東京専門学校（現、早稲田大学の前身）を首席で卒業、12月7日に横浜港より出航、一路、アメリカという新天地に旅立ち、他方、ベラは12歳の身で、まだ見ぬ父の国、アメリカはフィラデルフィアへと、その生涯のコースを決する新世界へと、同様に巣立ったのでありました。

それにしても、ご両人のそれぞれの目指したものには微妙な差異が認められるようです。

「我はむしろ冷たからんか、熱きを望む、なまぬるきことよりは」

「目指すはただ Best のみ、Good にも Better にもあらず」

これがベラの座右の銘でありました。ひたすらに、最良を目指す勉学であり、教育でした。

他方、朝河氏は申します。

「……私は暑い熱より、白熱をもって人々を啓発したい。私が偉大さを感じるのはただ一つ、真実の光です。昏蒙（こんもう）の人間にとり至難の業ですが、この〈熱なき真実の光〉、これこそ私の生涯の念願です……」（1924年12月19日、ベラあての書簡より）と。

〔注〕 朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』（早稲田大学出版部、1993年9月）所収。なお同論考に収録した日記・書簡（邦訳文）のすべてに、朝河博士の息吹きを生（なま）に伝える。その手記原文（英文）を配した増補改訂版がある：『朝河貫一の後年を彩った女性——その哀切なる愛と傷心の軌跡——』（中央学院大学教養論叢、第6巻第2号、1993年9月）

〔付記〕 本稿の作成に当り、その資料『荒野に水は湧きて——ベラ・アルウインの生涯——』の自由な使用を快諾された同編集委員会（青木八代・金井うた・成沢貴代子・南富美代・山本博・山本達郎の諸姉・兄、特にその中心的存在であら

れた、金井うた姉) に対して、深甚なる謝意を表するものであります。ベラさんとは一体、どんな人だったのだろうか。筆者、年来のこの疑問を見事に解明して下さいました。なお、本稿は「朝河貫一研究会」第 18 回例会(1994 年 4 月 23 日、早稲田大学社会科学研究所) において発表されたものです。